

生徒が主体的に発信し、相互理解を深める能力の育成

—その2—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

高橋 深美・秋元 佐恵・阪田 卓洋
須田 智之・多尾奈央子・八宮 孝夫
山田 忠弘

生徒が主体的に発信し、相互理解を深める能力の育成

—その2—

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

高橋 深美・秋元 佐恵・阪田 卓洋
須田 智之・多尾奈央子・八宮 孝夫
山田 忠弘

要約

今年度は本校 SSH 研究指定校第 4 期の二年目である。研究開発課題は「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探求型学習システムの構築と教材開発」となっており、その研究の柱の一つが「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探求型学習の教材開発と実践」である。

SSH 第 3 期以来、本校生徒による日本国内外における研修や、英語での研究発表の機会が増えている。今年度も、台中高級第一中学校研究交流（台湾）、釜山国際高校訪問（韓国）、他校 SSH プログラムによる海外派遣（アメリカ・タイ等）の各プログラムが実施されている。

このため英語科では、海外の文化を広く受け入れ、国際社会に向かって発信する能力の育成を目指す教育活動を継続するとともに、普段の授業を通じて生徒が主体的に学ぶ学習環境作りを探求している。

さらに、外部講師によるワークショップ、講演会を実施するとともに、イングリッシュルームを活用して、生徒の発信力の向上に努めている。

1. はじめに

1.1 英語科の授業構成

本校英語科では、中高 6 ヶ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6 年間で基礎期 [中 1・中 2]・実践期 [中 3、高 1]・発展期 [高 2・高 3] という 3 段階に分けて位置づけ、それぞれの特徴に応じた指導を行っている。

各学年の授業は以下のとおりである：

中学 「英語」 4 時間 (LL・TT 各 1 時間を含む)

高 1 「コミュニケーション英語 I」 3 時間+

「英語表現 I」 2 時間 (TT1+LL1)

高 2 「コミュニケーション英語 II」 4 時間

(TT 1 時間を含む)

高 3 「コミュニケーション英語 III」 3 時間 (選択)

「英語表現 II」 2 時間 (選択)

本校英語科ではどの学年、科目においても「英語は英語で教える」ことやコミュニケーション活動を重視した教育を共通理解として指導にあたっている。

1.2 英語科の取り組みの指標

本校の教育目標は『『自由闊達な校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念にもとづき、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる』ことである。また、SSH 研究開発課題として「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成」が標榜されている。そのため、英語科では発信力・プレゼンテーション能力の涵養を念頭においた教育活動を行っている。

本論では、今年度の英語科の取り組み、および国際交流の実践について述べる。

2. 各学年における取り組み

2.1 中学 1 年生 (72 期) 担当：多尾奈央子

2.1.1 はじめに (基礎期のスタート)

小学校での英語教育は外国文化や外国語に対する興味醸成に成果を出しながらも、いまだ様々な問題を抱

えており、今年度の指導でもその問題を実感しているが、それぞれの学校での取り組みが定着してきたことは窺える。中学1年生を担当する際、毎回授業初回に小学校までの外国語学習に関わるアンケート調査を行っているが、過去の回答を比較しても活動の内容や週当たりの活動時間の幅は大きくも、少なくない生徒が、早くは小学校1年次から何らかの外国語活動を経験しており、言われていることは何となくわかるという報告が増えている。そのためか、外国人教師との授業での会話やペア活動、さらには発表活動等に抵抗感がなく、積極的に外国語を使う態度は養われてきていることは感じる。その反面、その場の状況やジェスチャーなど文字を介さずにある程度の活動内容が感覚的に理解できることから、指示を聞き流したり、聞こえた単語からかいつまんで指示内容を自分なりに解釈する(必ずしも正しくはない)「癖」が身についてしまっていることも強く実感している。

外国語(英語)を教科科目として「学習する」という心構えと姿勢を身に着けさせることが、中1での重要な指導項目であると考え、その点を重視して指導計画を練った。

1年間の授業を始めるにあたって生徒には、中1での到達目標として、以下5点を示した。

- 1) 英語らしい音声を身につける。
- 2) 積極的にコミュニケーションを図る人になる。
- 3) 100語でまとまりのある英文を書くことができる。
- 4) 100語のまとまりのある発表をすることができる。
- 5) 英語の論理を理解し、正しく運用できる。

2.1.2 授業の概要

2.1.2.1 授業の構成

英語の授業は週4時間あり、そのうち2時間を教科書中心の授業(=英語の基本的な構造から「型」や論理、および最終的には内容を産出するに必要な語彙を学ぶ時間)、1時間をLLでの授業(=聴解力を養う時間)、1時間を外国人教師とのTT授業(=他の3時間で学んだことを実際に運用しながら、英語でコミュニケーションする力を育成する時間)と位置付け、指導を行っている。

いずれの授業でも、小学校外国語活動で身に着けた外国語に対する好意的関心を学習の中で失わないように、生徒にとって身近な語彙や場面設定および文章の型で繰り返し、たくさんの発話練習をすることでコミュニケーションに不可欠な「語彙」と「型(語順)」を身につけられるように教材作成・授業展開に留意した。

2.1.2.2 教材

- ・2時間の授業

三省堂 *New Crown English Series 1 mpi* 『Active Phonics』

数研出版 『5-STAGE 英文法完成 BOOK 1』

自主教材(プリント)

- ・LL授業

Oxford University Press : *Listen First*

- ・TT授業

正進社 『Talk and Talk』

Heyer, S. (2005) *All New Very Easy True Stories*.

NY: Pearson Japan

Heyer, S. (1998) *Very Easy True Stories*.

NY: Pearson Japan

自主教材(プリント)

その他、NHK 語学番組の『基礎英語 1』聴取の継続を推奨している。

長期休業中は課題として reader 書籍を与え、昨夏は Oxford University Press の *Let's Go to the Rainforest* を課した。全体を通読させ、その内容理解について確認する授業回を設けるとともに、自分で選択した好きなページを暗唱し披露しあう暗唱発表会を2学期当初の授業で行った。

日々の授業では、実際に検定教科書を開くことはせず、教科書題材や内容を踏まえた自作のプリントを作成している。というのも、教科書を開いても、架空の学校で登場人物が自己紹介をしたり、好きなものを紹介したり、*this* や *that* の導入では自分たちとの関わりを持ちづらい材料となっている場合が多いので、現実でどのように表現を使用するのか、学んだものを運用までつなげにくいからである。よって、教科書の文法や語彙は踏襲しながらも、生徒たちの身の回り、実際の生活に即した場面や英語を使うよう努めた。

2.1.2.3 教科書中心の授業とTT

4月～5月中旬は、フォニックスを利用して綴りと音の関係の確認や慣用句的な英語の表現などを中心に、小学校英語からの円滑な橋渡しを意識した授業を行った。

6月以降は教科書の題材を基に、be 動詞・一般動詞・疑問詞を使った疑問文・because/when などの接続詞・現在進行形・過去形・過去進行形を順次取り上げ、知識ではなく道具としてこれらの文法事項を活用できるようになることを図った。

教科書ベースの授業では以下のような授業構成が基本である。

- 1) small talk でウォーミングアップ
- 2) その日に取り上げる文法事項を使った本文の確認
- 3) その日に取り上げる文法事項を使った活動
- 4) 学習事項について「書く」「話す」発展活動

TT 授業では、該当する文章の型の状況に遭遇した時に発話できるよう既習の文法項目を反復練習し、応用して自分自身のことについて述べる発表活動を行った。人前で発表することに慣れ、聴衆に伝わるような発表能力を積み上げるために、毎回全員（を目指す）が発話できる場を設けた。評価は都度行い、フィードバックをするが、生徒による相互評価も織り込み、互いに encourage させることからプレゼンの成否は話し手だけでなく、聞き手の姿勢も大事であることを理解させるべく努めた。グループ活動で生徒たちが相互評価の様子を観察していると、教師の評価よりも生徒たち自身が評価し合う基準の方が厳しいことがわかった。また、指摘されたことをなんとか正そうと素直に応じる様子から、生徒たちの相互評価による学び合いは非常に効果的である。このことを特に強く実感した授業を例として一つ挙げる。以下は外国人講師との打ち合わせのほか、授業で生徒へ活動内容と手順を説明したものである。英語での説明を聞く量は中1対象としては多いが、説明しながらデモンストレーションを行ったためにスムーズに理解できていた。

Activity Type: Speaking activity, group work

Language Focus: Past simple affirmative sentences

Aim: To make past simple affirmative sentences using time expressions and verbs.

Procedure:

1. Split the class into groups of four or five.
2. Give each groups a set of time expression cards(24 cards) and verb cards(24 cards). Have the students shuffle the two sets separately.
4. Students put the time expression cards face down in a pile on the desk and deal out the verb cards equally. Each player should have six verb cards.
5. Students take it in turns to turn over a time expression card from the pile and then make a true past simple affirmative sentence using one of the verbs on their cards and the time expression.
6. If the speaker constructs a believable past simple affirmative sentence, which is agreed on by the other students in the group to be true, the speaker

may discard the verb card. If the other students think the sentence can't be true, is grammatically incorrect, or the wrong verb form is used, they challenge the player, and he has to keep the verb card.

7. The goal of this activity is to be the first speaker to get rid of all his verb cards.

この活動は、英文を作成するのに手持ちの6つの動詞から選択できることで自由度があるとともに自分自身に関わることを発話する機会が増えることにある。きちんと意味のある文章を発話しなければならないことから意味や用法に意識が向くことはもちろん活動目的の一つであったが、生徒たちはおのずと正しく、かつ聞き手の気持ちを掴むような英文にしたいというモチベーション向上にもつながったようだ。グループによっては独自のルールを設け、グループで難易度を調整しており、本校生徒の特性がよく表れた活動となった。

個別の発話活動以外の全体発表の際の指導ポイントは、Speak slowly, loudly and clearly. および Eye Contact とし、これは活動如何によらず、すべてに一貫させた。その他、適宜 posture, gesture や visual aids の効果的な使い方、またはその逆もフィードバックを与える際に指導した。

2.1.2.4 LL 教室での授業

中学1年生の授業科目「英語」の週4時間のうち、1時間を視聴覚機器が常設されている LL 教室で行っている。この教室は、各生徒卓にそれぞれヘッドフォンが付き、USB 挿入口のついた生徒操作パネルで活動によっては生徒個別のペースで聞き返したり、課題を録音して提出、自分の発話録音を聞いて練習を繰り返したりと、全体・個別での活動が様々展開できる可能性を持っている。ここでの授業の利点として、教師側の PC から授業で使用した音声を生徒卓へ送信したり、ペアやグループを組んだり、スクリプトや解答、さらには関連する情報（web ページや映像）まで、生徒モニターに瞬時に提示できることが挙げられる。教科書は ESL 入門期用の Listen First (Oxford University Press) を使用し、自然な英語の音声を認識し、その内容を理解すること、聞いたことを文字として正しく書ける（表記できる）ことを中心とした授業を行っている。

小学校での外国語活動から英語の音声には随分と慣れてはいるものの、聞こえた語から発話内容をかいつ

まんで理解する癖がついており、正確にはどのような語が、どのようなルールで使用されているかの理解には不安が強く残る。また、綴りについては聞こえた音そのままをローマ字表記にしてしまうことが多い。聞いた英語を正確に理解し、自分で書き起こし、弱音や脱落する音については学習した文法知識等で補完して正しく output することができることを目標とした。

使用教科書には、簡潔な英語での指示文と聞き取りの中心となる語彙が英語で表記されるほかはイラストのみが示されている。音声は英語の自然な速度や口語表現が入門期学習者用に過度にコントロールされずに用いられていることから、聞いて学習したことを使って自分でも発話・応答できるように指導しようと努めた。

授業の流れは以下の通り。

- ① 前時の復習（異なるイラストや設問、口頭で）
- ② 新出語、表現の導入
- ③ 聴解問題やディクテーション
- ④ 発話練習

上記④では、LL 教室のシステムを利用して、生徒一人を選びモデルとして教室スピーカーを通して聞かせたり、ランダムにペアを組み、顔が見えない状況の中、音声だけで意思疎通を図るタスクを課したりすることから、明瞭に発話すること、話し手に傾聴することの大切さを理解させたいという意図がある。設備の不調で2学期はあまり実施できなかつたが、過去の実践からはコミュニケーションを断絶させずに維持するためには、間違いを恐れず、伝えるべき内容を既習の言葉を駆使してまずは発話することが大事であることを生徒たちは体感していたので、今後話すことへと活動を展開していきたいと考えている。

2.1.3 評価

評価材料の主なもの以下の通りである。

- ① 期末考査
- ② 小テスト
- ③ 課題（復習のための問題集と自作プリント）
- ④ 発話・発表活動

このうち、④では学期末のパフォーマンステストを行うこともあるが、その土台作りとしても毎回の授業で一人でも多くの生徒が少しでも多くの機会に発話したり、全体へ向けて発表できる場を設定することに努めた。その場面設定や、英語が得意な生徒も不得手な生徒も同様に取り組み、一定の成果を実感できるレベルの英文を用意するのが最も難しいところである。

生徒自身が各自自分のできている点ともっと力を入れたほうがよい点について客観的に把握しづらいことから、いかなる学習活動でも机間指導しながら、都度個別に評価する方法の工夫に努めた。個人カードの作成はそのためのものである。

個別の学習内容について、時間的にも授業時間を多く割かず確認および評価、助言などの段取りを案出し実行することは難しいものだが、生徒の学習状況を把握し、学習行動を迅速に改善させ、モチベーションを高めるにもよい方法である。一定の型を継続して授業を行うことで、生徒自身もいつ、何を評価されるのかを把握することができ、授業や課題への取り組みはより積極的になっているとうかがえる。

2.2 中学2年生（71期） 担当：阪田卓洋

2.2.1 はじめに（基礎期）

筆者は昨年度からこの学年を担当しているが、2年目を迎えるにあたり、次の3点を意識している。

1. 今まで以上に「生の英語」を与える。
2. 生徒が作ったものを教材にする。
3. 生徒が授業を作る。

1に関しては、英語の既習文法項目が増えるごとに、教科書の中だけではなく、実際に使われている英語を理解することが可能になる。また、Graded Readersなどの自然な英語で書かれた英文を多量に読むことも可能になる。授業では多くの自然な英語の input を与えることを意識している。

2は今年度の新しい試みである。教員としては教材を作ることは楽しいことであるが、同時に、多くのことを勉強する機会でもある。ということは、生徒が教材を作れば、必然的に勉強することになるのでは、と思った次第である。

3に関しては、教員が英語を話し続けるのではなく、生徒が全員の前で英語を話している時間、あるいはペアで英語を使っている時間を増やす、という意味である。1時間の中で少なくとも1人は全員の前で英語を話す、という時間を作っている。

これらの点を踏まえながら授業実践を以下に報告する。

2.2.2 授業について

英語の週配当時間4時間は3つの要素から構成されるが、筆者の担当は「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」2時間と「ALTとともに実際に英語を使ってみる時間」の1時間である。最後の「LL

教室で聴解能力の訓練をする時間」1時間に関しては担当の高橋深美教諭に詳述してもらおう。ここでは筆者が担当している授業の概要を述べる。

2.2.2.1 授業の種類

先述したように筆者が担当する3時間のうち、2時間は筆者単独の授業で1時間がALTとのTTである。昨年度まではこれらの時間を区別することなく、一貫性を持って進めていたが、今年度は筆者単独の授業でリーディングを主に扱い、TTで口頭による発話練習を主に取り入れることにした。

2.2.2.2 授業の進め方

2.2.2.2.1 1学期

1学期の最初は教科書 *New Crown 2* を使用し、Lesson 4でThere is/are ~.と動名詞を、Lesson 6でto不定詞を扱った。大まかな流れは以下の通り。

1. 新出語彙の確認
2. 本文の音読
3. 簡単な解説
4. Read & Look up, 穴埋め音読

筆者は教科書を、重要な文法項目を含む英文を頭の中に叩き込むための教材として位置付けている。例えば、不定詞などは3用法を短い英文で端的に示しているものが教科書以外には見つけづらい。ストーリー性を持った英文で、短く、重要な文法項目が無駄なく盛り込まれている、という点で教科書は暗唱するに値すると思っている。

1学期の後半は、多読の目的で *Sherlock Holmes and the Duke's Son* (Oxford University Press) を使用した。原題は *The Adventure of the Priory School* だが、このGraded Readersではこの物語のオチの要素を生かして題名を変えている。シャーロックホームズのシリーズは、事件の謎を解きながら読み進めていく感覚がとても楽しく、知的好奇心旺盛な本校の生徒にはこの上ない教材だと思う。授業の進め方は以下の通り。

1. Oral Review (with interactions)
2. (Brief) Oral Introduction
3. Silent Reading
4. Check Student's Understanding (T & F, English Questions)
5. Grammar Explanation
6. Reading Aloud (important sentences)

多量の英文を頭から読みこなししていくことを狙いとし

たため、1時間で600-800語近くの英文を読んでもらった。全文完璧に分かる必要は無く、物語を理解できていればよいとした。それでも内容理解が厳しい生徒は出てくるため、毎時間の冒頭にOral Reviewで人物相関図、事件が起きた場所の地図を利用して何度も復習をした。またイギリスで制作されたドラマ(ジェレミー・ブレット主演、1985-1986)を2回に分けて視聴し、舞台となったイギリスのcountryside, moorのイメージを掴んでもらった。こういった復習や視聴覚教材のおかげで、6000語近い英文だったが、1か月かけて楽しみながら読み進めることができたと思う。生徒達からはシャーロックホームズの他の作品も読んでみたい、という声もあった。残念ながらGraded Readersの易しいレベルで扱われているのは、この作品と *Sherlock Holmes: The Blue Diamond* (Oxford University Press)であり、他の作品はレベルが高くなってしまふ。今後の学習状況を見て、また違う作品を扱いたい。

英文の中で既習文法に関しては、適宜指摘し、プリントに抜き出し、解説をした。本当は音読、暗唱までしたかったが残念ながら授業時間が足りず、そこまで到達できなかった。これが2学期への反省となる。

2.2.2.2.2 パフォーマンステスト

先述したシャーロックホームズの一場面を演じてもらう課題を出した。グループで演者を決め、指定された時間内に動画を撮影し、Google Classroom(ネット上に作成したクラス)に動画を提出してもらった。テスト期間後の特別時間割で、全員で視聴し、主演男優賞、作品賞を投票で決めた。

2.2.2.3 2学期

2.2.2.3.1 授業内容

夏休みの課題として *The Adventures of Tom Sawyer* (Macmillan) を出した。児童文学として有名な作品であるが、知識として知っているだけで全部を読んだことがある生徒は少ない。また、冒険物語として子供たちの好奇心をくすぐる内容であり、挿絵がふんだんにあるため、自力でも読みやすく、後の授業でStory Retellingまで持っていくことが容易である。Oxfordからも易しいレベルで同じ作品のGraded Readersが出ているが、Macmillanと比べると、ストーリーが羅列されている感覚が強く、一読したときの面白さはMacmillanの方が勝っていると感じている。

1学期の反省を生かし、夏休みに多量のinputを与

え、授業ではその中の一部を徹底的に頭の中に叩き込む intake の時間を確保し、Picture Description, Story Retelling まで持っていくことを目標とした。また、創造力、表現力の伸長を目指し、同じ絵に違う description を与え、その絵に違う世界観を与えることを追加課題として課した。その集大成が、公開授業で扱った「英語で大喜利」だった。

授業の進め方は以下の通りである。

1. Oral Review
2. New Words
3. Fill in the Blanks (Summary)
4. Reading Aloud
5. Grammar Explanation
6. Grammar Practice / Picture Description / Story Retelling

最初にオーラルで前時の復習をしてから、本時の内容に入る。と言っても、夏休みにすでに読んでいるため、要約を完成させる課題を出す。本文と要約を同時に読みながら穴埋めをするため、この時間に 200 語近くの英文に目を通すことになる。その後は、既習文法の説明と演習をする場合もあれば、先述したように、絵を見て物語を再生する活動を行う場合もある。この区別はストーリーとしての面白さで決める。面白い場面であれば retelling の課題を出すし、あまり面白い場面でない箇所は文法事項の説明をして、重要英文の音読・暗唱をする。

宿題として Picture Description の writing 課題を出し、元のストーリー通りに書いても良いし、オリジナルストーリーを作って提出しても良いことにした。多くの生徒が面白いストーリーを作ってくれたため、それを一覧にして後日配布した。

2.2.2.3.2 パフォーマンステスト

1 学期と 2 学期で長い物語を 2 本読んだため、”What is the best [movie] book to you?” という題でスピーチをしてもらう予定。2 分程度で内容を簡単に説明した後に、その作品の魅力を語ってもらう。

2.2.3 その他、授業外

2.2.3.1 期末テスト

期末テストはライティング能力を高める絶好の機会であるため、生徒たちに事前に詳細なテスト範囲を配布し、しっかりと英文を書いてくるよう指示した。B4 の裏表の解答用紙で、基本的に英文を書かせる問題だけにした。記号や単語で答える問題は全体の 1 割程度

である。これにはかなり苦戦しているようであるが、筆者はもちろんこの波及効果を期待しているのであり、「たくさん書かされるから試験前にたくさん書いて練習しておかない」という意識付けができれば良いと考えている。

試験採点の結果、成績の芳しくない生徒には別途補習をしている。

2.2.3.2 副教材

文法学習用の自習用教材としては『5-Stage 英文法完成 BOOK2』(Chart Institute)を使用している。文法問題だけではなく、CD 付きで dictation 問題も付いているためこの問題集を採用した。

2.2.4 今後の課題

3 年生に向けて、さらに多量な input を与えながらも、その中の一部分を徹底的に暗唱させるなど、intake の時間も大事にしたい。週 3 時間の中で input → intake → output のバランスを意識した授業計画を心掛けていきたい。

<参考文献>

- Murphy, R. (2015) *Essential Grammar in Use (4th ed.)*. Cambridge: Cambridge University
Molinsky, J.S. & Bliss, B. (2001) *SIDE by SIDE (3rd ed.)*. NY: Pearson Education

2.2.5 LL 教室を使った授業 担当：高橋深美

中学 2 年生では Basic Tactics for Listening (Third Edition) をテキストにして週 1 回 LL 教室を使用した授業を行っている。

基本的にはこれはリスニングの授業と位置付けている。教材は全 24 ユニットからなり、1 時間に 1 ユニットのペースで進行している。トピックは Sports, Family, Restaurants, Weather, Shopping など、日常的な題材がとられている。内容は平易であるが、CD にはノーマルスピードで音声録音されており、細部まで理解することは目標にしていない。また使用されている文法事項には、初めの方のユニットでも現在完了、関係代名詞、比較級、受動態などが使われており、適宜そのユニットを理解するのに必要な文法事項を補足しながら進めることとなる。

また、テキストはカラフルでよいのだが、問題が 2 択と 3 択のものが圧倒的に多く、ある程度情報を聞き取って記入するためのワークシートを別に作成してい

る。

2.3 中学3年生(70期) 担当:須田智之

2.3.1 はじめに

筆者は本校の66期生の中学3年間の授業を担当した経験があり、今年度は2サイクル目を担当している。中学3年生では「Communication Skillとしての英語運用力の完成」、「英語を使って世界と繋がる」、「英語の発想により慣れる」という3つの目標を年度当初に掲げた。最初の「英語運用力の完成」という部分はやや大げさであるかもしれないが、多くの生徒が「英語を使用言語とした学び」に耐え得る素地を確実に身につけつつある。その具体例として、高校進学後に1年間の海外留学を希望する生徒が多く、その生徒達を筆頭に、英語を用いての深い学びが可能である生徒が多数見受けられる。また、総合学習の選択講座であるテーマ学習「Science Dialogue Jr.」の授業を見学した際には、参加生徒たちが海外からの若手研究者による英語での「数学研究とは何か」という講義に熱心に耳を傾け、問題に熱心に取り組む様子が確認できた。更に、昨年までの実践の成果からか、英語の歌や映画などを通して自分の学びを報告してくる生徒、インターネット等のメディアを通して自分の興味関心のある分野に関して英語で積極的に情報収集している生徒も数多くいる。

このような現状の中で、本校の英語授業での最終目標は「コミュニケーションの手段としての英語を身につけさせること」・「知識に留まらない英語運用力を養うこと」であると考へ、実際の授業を組み立てている。

2.3.2 授業での取り組み

英語の週配当時間4時間は昨年までと同様に3つの要素から構成される。「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」2時間、「LL教室で聴解能力の訓練をする時間」1時間、「ALTとともに実際に英語を使ってみる時間」1時間という組み立てであり、今年度は筆者が全てを担当している。以下に授業の概要を述べる。

(1)教科書中心の授業(週2時間)

New Crown English Series 3(三省堂)を基本的には使用しているが、題材の扱いの深度に強弱をつけ、教科書以外の発展的な内容も取り入れながら、英語での意味の伝達に重点を置き進めている。1学期は次の4課を学習した。

1. My Favorite Words (*Crown 3, L.1*)

2. France—Then and Now (*Crown 3, L.2*)

3. *Rakugo Goes Overseas* (*Crown 3, L.3*)

4. The Story of Sadako (*Crown 3, L.4*)

教科書を扱う際には、題材導入の会話部分は簡潔に済ませ、その後の読み物の部分を **Oral Introduction / Interaction** で教材を導入・内容理解を実施し、音読、まとめや発展的学習というスタイルを目指している。発展的学習の内容としては **My Favorite Words** に関連して自分の好きな名言を、また *Rakugo Goes Overseas* に関連して、短い英語落語の演目を、それぞれ1学期末のパフォーマンステストとして発表してもらった。また、*The Story of Sadako* では *Sadako and the Thousand Paper Cranes* (**Puffin Modern Classics**)の一部を扱った。

2学期に扱った教材は以下の3課である。

1. Places to Go, Things to Do (*Crown 3, L.5*)

2. I Have a Dream (*Crown 3, L.6*)

本校英語科では2学期教育実習生を受け入れることが多いのだが、実習生のリクエストで世界の色々な国について扱っている **L5** を担当して頂いた。授業に際しては教科書の内容を踏まえつつも、ご自身の出身の島根県にある石見銀山や、留学されていたインドネシアについてなど、臨場感あふれる形で教材としてご紹介頂いた。**L6** では、発展的学習の内容として、キング牧師の演説と **BTS** のリーダーRM が国連で行ったスピーチのどちらかを選択させ、その一部を暗唱し感想を述べるという発表に取り組みさせた。

3学期には教科書の **L7** の他、長編の読み物教材(題材未定)などを使用する予定である。

年間を通しての活動として、1学年時から継続して音声面強化と **Warming-up**、更には文法事項の導入を兼ねて英語の歌を紹介し歌わせている。1学期には **Ylvis** の *The Fox (What Does the Fox Say?)*、**Bruno Mars** の *Just the Way You Are* など、2学期は実習生の選曲である **One Direction** の *Story of My Life* と、再び **Bruno Mars** の *Talking to the Moon*、**U2** の *Walk On* などの歌を扱った。

(2)LL教室での授業(週1時間)

LL用コースブック *Tactics for Listening* (**Oxford** 大学出版)をコースブックとして使用している。今年度は筑波大学の大学院生でもある講師の小松先生に授業を受け持つて頂いているが、動画や歌などのオリジナル教材も交えて授業を展開して頂いた。教科書の題材に関連した映像や映画などの視聴も実施している。

1学期は英語落語 **Time Noodles** に関連する動画を見

せた。2学期は『42 世界を変えた男』を見せたが、人種差別について、野球（スポーツ）という別の角度から考えるよい機会になったと思う。

(3) ティームティーチングの授業（週1時間）

アメリカ人講師の ALT と共に行う授業で、語彙力増強を図りつつ、新出の文法事項の定着とともに実際に使える英語力の育成を目指している。校外学習や文化祭などの学校行事や日本文化について英語で表現するなど、自らの経験・身の回りの出来事について英語で表現できるように、1年間の中でその時々によさわしい題材を取り上げるようにしている。

2.3.3 その他、授業外での取り組み

(1) English Journal

前サイクルの 66 期同様に、生徒に時折テーマを与えながらある程度まとまった分量の英文を書く指導をしている。これまでのトピックは自分の好きな名言について、GW の思い出、校外学習についてのレポート、夏休み日記などである。Google Classroom を活用して PC 上で英語のライティングに取り組みせることによって、生徒の作品を一斉に回収することが可能になった。しかしながら、ノートに紙ベースで書かせていた 4 年前と比較すると、以前ほど自宅学習の活動として定着していないと思われる為、今後も指導方法を検討していく必要があるだろう。

(2) パフォーマンステスト

学期ごとのパフォーマンステストとして、英語による発表活動を行っている。1 学期には自分の好きな名言の紹介、校外学習についての報告、英語落語の実演の 3 つから 1 つを選択し発表してもらった。特に英語落語の発表が素晴らしく、数名の生徒に保護者会にて再度実演してもらったところ、非常に好評であった。2 学期にはキング牧師の演説 I have a Dream または BTS のリーダー RM の国連でのスピーチどちらかの暗唱に取り組みせる予定である。

(3) 副教材など

英語力を定着させるためには週 4 時間の英語の授業（＝総計 200 分）だけでは足りないのは明らかである。生徒には NHK ラジオ講座『基礎英語 3』や『ラジオ英会話』などの聴取を奨めている他、文法学習用の自習用教材としては『新中学問題集』（教育開発出版）と『マーフィーのケンブリッジ英文法（初級編）新訂版』（Cambridge University Press）を併用している。

(4) 多読

昨年度に続いて、今年度は Scholastic 社の TrueFlix

というオンライン多読に取り組みさせている。しかし、残念ながら今年度も再び多読に関する継続的な指導ができなかったというのが現状である。この点に関しては、昨年度から継続した視点でオンライン多読の指導を見直したい。

2.3.4 今後の課題

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、授業と生徒の自主的な学習の相互作用をいかに深めていくか、また、塾などでの学習に強く依存している生徒が多数いる現状では、生徒たちの興味関心を喚起する教材をいかに提示し、またその教材を用いて生徒たちが英語を実際に使用しながら身につけていく場面をいかに多く提供していくのが今後の課題である。

2.4 高校 1 年生（69 期） 担当：八宮孝夫

2.4.1 はじめに：年間の目標など

筆者が年間の目標と考えているのは以下の通りである：

- 1) その課で学んだ教材の概要やそれについての感想を英語で表現できる。
- 2) 英語学習はことばの学習である、という意識づけをさせる。

英語の運用力をつけるのはもちろん重要であるが、語源とかそのことばの持つ文化的背景など、ことばへの関心を高めることも同様に大切である。

筆者が過去 2 回担当した学年は、中学 1 年から 6 年間通して担当したものであり、その点で、高校 1 年から新たに授業を担当するのは久しぶりであった。したがって、1 学期は、筆者の授業スタイルに慣れてもらうことを 1 つの目標とした。

2.4.2 基本的な授業スタイル

筆者の授業スタイルといっても、特別なことがあるわけではないが、通常の授業は以下のような流れで行っている：

- 1) Review Summary: 出席点呼の時間を利用して、前時の内容の要約した英文にいくつかブランクを作ったプリントを用意し、文脈に応じて要約を完成させる。前時の本文内容、キーワードや新語・表現などを思い出させ、クラスの生徒全員に common ground を与える。
- 2) Oral Introduction: 本時の内容を、英語で導入する。新語や、キーワードを意識して適宜リピートなど行う。板書とともにイラストなど用いて、視覚的にも

理解しやすいよう心掛ける。また、すべて導入するのではなく、リスニング・ポイントになる部分を4, 5か所残しておく。(筆者は基本的にプリント教材で授業を進めているので、リスニングが終わるまで、生徒は文字として本文を目にする機会はない。キーワードや、内容に関係する新語などは板書時に提示するので、厳密に言えば、部分的には文字を目にしている)

- 3) **Listening:** 上述のリスニング・ポイントの内容を聞き取るよう指示し、概要をつかませる。内容が聞き取れたか Q & A で確認し、回答に困難だったものは、次の本文説明で補足をする。
- 4) **Explanation:** (ここで初めて本文プリント配布) Oral Introduction で触れなかった部分(複雑な文構造をしている部分など)、上の Q & A で理解が不足と思われる部分などを中心に、日本語で説明をする。
- 5) **Chorus Reading:** 内容が理解できたところで、英文の音読を行う。時間が許せば、Buzz reading / Individual reading も行う。また、Read and look up の手法を用いて記憶に保持しながら音読する場合もある。また、本文付属 CD には、フレーズ単位でポーズを置いたものもあるので、文字を見ずにそのフレーズを聞いてリピートする練習も適宜取り入れている。
- 6) **Consolidation:** その日の表現のまとめなど。

2.4.3 Retelling に関して

上記の流れでわかる通り、筆者は毎回の授業において本文の Retelling まで実施しているわけではない。ただ、生徒には、文字の穴埋めとしてサマリーができるだけでなく、板書のイラストとキーワードで内容を英語で表現できることが大切であると意識づけはしている(実際に、復習の際、前時のイラストを貼り、内容を英語で言わせることは行っている)。ただ、はっきりとした形としては課全体のサマリーの際に、まとめとしてその課のイラストを配布し、それを見て Retelling することを学期末の課題として全員に発表させ、評価の一部に加えていることがあげられる。

それでは、ここまでに扱った教材を見ていく。

2.4.4 1学期の教材

高1で採択している教科書は *Unicorn English Communication 1* (以下、UECI) であるが、これにこだわらず、有益と思われる教材を適宜使用する(本校は同一学年を1人の教師が担当するので、教材選択

は比較的緩やかである)。

① Holmes and Watson:

UECI の第2課である。新入生にとって、いきなり教科書以外の教材を扱うよりも、教科書の教材から入ったほうが安心するだろうし、また、内容的にもなじみがあり比較的導入しやすい教材として採用。上述したイラストなど用いた Oral Introduction を行い、後で別紙のような Summary chart を配布し、それに基づいた Retelling を実施した。

文法的には、中学既習である現在完了と受け身の復習を行った。

② Railroad Man:

筆者は、Bob Greene のエッセイであるこの教材を、過去3度ほど使用し、それについては『駒場論集』(48集)(54集)にまとめた。一部引用すると「米国で鉄道の黄金時代に車内の給仕として就職し、花形のスーパーチーフ号などでも活躍したが、鉄道が斜陽になるに連れて、最古参の一人として働くも、鉄道が民営化(Amtrak)になってからの社員には忘れ去られた存在で、誰に褒められることもなく退職を迎えた、という話である。最後の日の淡々とこなし、誰にも例も言われず、駅舎を去るという結末は、読み方によってはもの悲しい印象も与える。事実、この話を「黒人差別の中の悲惨な話」と捉える生徒が圧倒的に多い(これまで教えてきた経験上)。つまり、非常に道徳的というか社会問題として捉えてしまうのである。しかし、この話の全体のリズムは決して暗く重苦しいものではなく、仔細に検討していくと文章の端々に、花形の列車で働いてきた自負、どんなに斜陽になっても淡々と自分の仕事をこなすプライドが感じられ、Bob Greene の意図も、その work ethic にあることがわかってくる。」

今回も、黄金週間の課題として読ませて感想を書かせたところ、やはり悲しい物語、とらえた生徒が圧倒的に多かった。授業では、本当にそうなのか、検討していった。例えば、Maybe he was invisible to many of his passengers という1文がある。多くの生徒は、これを主人公は多くの乗客に無視された」と否定的にとらえるのであるが、給仕にとって、乗客に対して invisible になることは優れた給仕の最大に心掛けていることなのである。つまり、この文脈では invisible は決して否定的な含意はしていないことになる。

今回の生徒のレポートの中で、1930年当時、長距離寝台列車のポーターという職業は黒人が就職できた数少ない職業であり、給仕もその一つで主人公は決して悪い境遇になかったという、歴史的な視点で述べたも

のがあった。調べてみると、確かにその生徒の指摘した通りで、黒人による初の労働組合も **Brotherhood of Sleeping Car Porters** で、結局これがのちの公民権運動(Civil Rights Movement)につながるものであった。

このように同じ作品でも、筆者自身、生徒に触発されて新しい視点でとらえなおす機会を与えられることも多く、同一の教材を繰り返し使うことにも意味があるように思われる。

なお、文法項目としては、助動詞の用法、仮定表現、<with + 名詞+~ing>を扱った。

③ Beowulf

この教材も、以前扱ったものである。まだアングロサクソン人が北欧にいた頃の英雄伝であり、古英語の代表的の叙事詩と言ってよい作品である。もちろん、原文では無理なので **Black Cat** 社のリトールド版を使用した。ただし、今回は、このリトールド版の改訂版が出て、編者も異なり、新版といってよいものであった。旧版、新版それぞれに優れた点があったので併用した。**Railroad Man** は、行間を読むような細かい読みをしたので、この教材ではある程度のスピードで筋をとっていき読みを目標とした。つまり、臨場感のある付属 CD を利用して、各章の背景を **Oral introduction** し、リスニング・ポイントを提示することで、いわば速読教材として扱ったということである。

ただ、今回は時間の関係で割愛した、**Beowulf**の原文の一部を韻文で扱うことは実施できた。これは、**Beowulf**を現代語に翻訳した **J.R.R. Tolkien** が、自分の子供に語るように内容の一部を詩にしたものである。1度散文(prose)で読み内容が理解できているものを、今度は詩として韻文(verse)で読む、というのは詩に親しむ良い方法と筆者は考える。

文法項目としては、不定詞の復習、過去形・過去完了形、同時進行を表す~ing (いわゆる分詞構文)などを扱った。

1学期は結局3つの教材を扱ったわけであるが、エッセイや英雄伝など比較的文学的な内容に偏り、科学的な英文を扱えなかったのは反省点である。

2.4.5 2学期の教材

2学期の実践について、概略する。当初、理系の文章である、教科書 **UEC1** の **L.5 Methane Hydrate** を扱う予定であったが、昨今の今頃はニュースにもなったものの、最近あまり話題にならず、また実現性も不透明で結局見送ることにした。

① El Sistema

教科書の **L.6** で、ヴェネズエラの、音楽を通じた人間教育システムとまたそれを提唱した **Dr. Abreu** について扱った課である。前回は教育実習生に担当してもらった教材で、筆者は実質初めて扱ったことになる。基本的には、本文の流れの通り進めたのであるが、ヴェネズエラの社会情勢とか、音楽教育の実際などは文字を通しての理解だけではなかなか実感できないものである。その点で、最近は **you-tube** なども充実しており、**Dr. Abreu** のドキュメンタリー的なコンテンツがあるので、適宜そういった映像を見せながら進めた。文法項目としては、過去完了形の復習、使役動詞・知覚動詞の構文<have/make/ see +名詞+原形動詞>など。

② The Greek Myth

今回の公開授業で扱ったものである。テキストは『ギリシャ神話』(**James Kirkup** 著: 成美堂)である。夏課題として、いくつかの章を指定し、内容を理解し、それについての設問を4,5個作らせる課題を出した。概要がよくわかっている生徒は、全体のサマリーとなるような設問を工夫する。部分的にしか理解していない生徒は、5つの設問が単発的で、全体として概要を問うている設問にならない傾向がある(課題の中で、「概要を問うような設問を4,5個作りなさい」という指示を出してあるのだが)。

また、1学期に学習した文法項目を含む文を指摘させ、文法の復習にもなるよう心掛けた(結局、学習した項目が実際の英文でいかに使用されているかを観察することが、文法理解の確認・定着につながると思うからである)。

授業では、第4章 **Two Monsters** の後半と、第5章 **Two Heroes** を扱った。順序的には逆であるが、まず、**Theseus and the Minotaur** を行い、次に **Medusa, Perseus and Andromeda** という順に進めた。前者の方が話が単純、後者は **Medusa** のところから **Perseus** が関係し、全体として1つの話になっており分量もやや多めだからである。

ここで、これまで筆者がどのような経緯で「ギリシャ神話」を授業で扱ってきたのかを概観しておく。

1) **Theseus and the Minotaur**: 中学2年生向けにやさしく書き換え、中学生にも理解しやすい英雄譚として、不定詞など導入しながら、内容理解させた。筆者に「ギリシャ神話」の知識がほとんどなく、この物語のみ扱った。2度目に扱ったときは、『ギリシャ神話を知っていますか』(阿刀田隆著・新潮社)で少し背景知識を取り入れて行った。

2) **Medusa, Perseus and Andromeda**: 高1の2学期

に扱う。 *Classical Mythology* (William Hansen, Oxford University Press)の関連項目を読み、神々の誕生など、「ギリシャ神話」の背景知識の導入も行った。また、*Metamorphoses* (Ovid)の英訳版を用いて、一部韻文でも紹介をした。今回は、これに加えて、*The Heroes* (Charles Kingsley, Everymans) と *Mythology* (Edith Hamilton, Hachette Books)の Perseus, Theseus に目を通し、*The Tales of the Greek Heroes* (Roger Lancelyn Green, Puffin Books) を通読した。結果的に、「ギリシャ神話」は古代のだれが書いたものかによってさまざまなバリエーションがあることがわかり、それを授業で扱ったら面白いのではないかと、思い今回の実践に至ったわけである。

なお、この課で扱った文法項目は、関係代名詞・関係副詞の復習と非制限用法、be to ...の用法、繰り返しを避ける that などである。また、文化祭明けの口慣らしとして *The house that Jack built* を使用した。非制限用法ではないが、関係代名詞関連ということで扱ってみた（筆者は通常、中2の終わりから中3の初め頃、この nursery rhyme を使用する）。

2.4.6 公開授業：一種のジグソー法を用いて

公開授業までは、夏課題に指定した *Theseus and the Minotaur, Medusa, Perseus and Andromeda* を通常通り、プリントに従って *Oral Introduction* から *Explanation, Reading aloud* という手順で進めていた。しかし、公開授業もあるということで、その応用編として、テキストに出ている以外の部分の読み取りを従来とは違うやり方で行った。これまでは、*supplementary reading* の部分を、クラス全体に配布し、設問に答えるような形で読ませ、それを全体で確認する、という形式をとっていた。

今回は、その *supplementary reading* を5パートに分け、4人からなる5つの班にそれぞれのパートを担当させ（エキスパート）、今度は各班のそれぞれ1名から構成した新たな班をつくり、その中でお互いの担当部分を説明しあうことで全体像が浮かび上がるような形式をとった。いわば新たな5人が集うことでジグソーパズルが完成するようなイメージで、「ジグソー法」と一般に称されている。ただ、これだと *supplementary reading* を読むのに20人しか必要でなくなってしまう。そこで、今回は、内容的にも分量的にも非常に近いが多少細かい部分で異なっているような *supplementary reading* をもう1バージョン用

意した。こうしてクラスのもう半分は別バージョンで展開することになった。当日の配布資料から引用する：

「内容的には、授業で扱った Perseus の冒険と *side story* で扱った、彼の生い立ちの以外の部分の読み取りで、生まれた際の運命、Medusa の首を獲りに行った経緯、Perseus に助力した者たち、海獣を倒した方法、結婚の際の後日談、などである。

類似した内容であるが、Version 1, Version 2 は、それぞれ微妙な点で違う。グループ 1-5 までは Version 1 を、グループ 6-10 が version 2 を読んでいる。Version 1 は米国で標準的なギリシャ神話の入門書 *Mythology* (by Edith Hamilton)からの抜粋である。一方、Version 2 は英国の児童作家による *Tales from the Greek Heroes* (by Roger Lancelyn Green) からの抜粋で、やや会話調でくだけた感じはあるが、読み応えのある英文である（長さの関係で、それぞれ私が多少編集した）。

本時の授業は、それぞれの *passage* の内容は理解した生徒たちが別の *passage* を扱った生徒たちと情報を共有するもので、発表などはなく、日本語が飛び交う可能性もある。」

実際に、英語を用いて内容を伝えよう努力をしていたグループもあったが、相当の部分を日本で教えあっているグループも認められた。英語で伝えるには、自分の担当した部分を要約したり自分の言葉に変える必要があるため、やはりまだハードルが高い部分があり、今回これが課題として残った。ただ、活動の最後の確認として、英問英答で内容の確認したところ、かなり活発に英語による返答があったので、内容の理解の点では、この形式でも支障はなかったと言える。

2.4.7 公開授業後

公開授業後は年間計画表に従い、*UECI* の L.7 *Why Are You Sleepy?* を扱った。物語的な英文を中心に読んできたので、科学的な英文に親しむ初めての機会であった。学期末のパフォーマンス・テスト（各生徒2分程度の発表活動）では、「ギリシャ神話」で扱った2つの話のどちらか好きなものを *retelling*、*Sleep* に関して自分の体験を英語で語る、*The house that Jack built* をイラストを指しながら演じる、の中から1つ選択させた。

生徒はこちらの予想以上に取り組んでくれた。半数の生徒が *The house that Jack built* を選んだが、積み上げ詩の最後の *the farmer* から始まるまで、全てに挑戦した生徒が圧倒的に多かった。また、それも

しっかりイラストを指しながらできた点を評価したい(写真1)。



写真1 The house that Jack built の発表

同様に、「ギリシャ神話」の retelling も、イラストを指しながら、立ち位置を考えて発表していた(写真2)。筆者は、聴衆の見やすい位置に立つことを日頃から注意しているので、黒板の向かって左側の絵を説明する際には、そのさらに左側に立たせるようにし、右側の絵を説明する際には、さらにその右側に立たせるようにしている。写真の生徒は両方ともその注意通りしている点が素晴らしいのである。

もちろん、まだまだ原稿に頼る生徒も多く、特にイラストを用いた発表でない Sleep については、その傾向が強かった。このあたりをキーワードに限定して待たせるなど工夫して、いかに、徐々に視線をあげて発表させるか、が今後の課題である。



写真2 Perseus の発表

冬休み課題は *Super-Frog Saves Tokyo* (村上春樹の『かえるくん、東京を救う』の英訳版) を課し、3学期に扱う。また、Thomas Jefferson の生涯と彼が起草した The Declaration of Independence を扱い、一部原文の暗唱予定である。

いずれも以前に扱ったことのある教材であるが、情性に流されず、新たな資料を加えて、臨みたいと思う。

2.5 高校1年生(69期)英語表現I

担当：山田 忠弘

2.5.1 はじめに

英語表現I(2単位)は、LL授業とTT授業(各週1)から成り、前者が Listening、後者が Speaking の内容となっている。中学校の時と同じく、LLはLL教室、TTはALTとのTeam Teachingで行われる。

2.5.2 LL授業

授業時間の半分で *Developing / Expanding Tactics for Listening* (Oxford University Press) の1セクションを進め、残りの半分は自作プリントを用いた別リスニング問題(CNN ニュースリスニング(朝日出版社)、*English Journal* (アルク)など)、洋楽の歌詞穴埋め(聞き取り)などを行っている。音声データやスクリプトは随時配布して復習できるようにしている。

評点(50点)は、テキストの4課ごとのまとめ問題を小テストとして使い、期末試験(初見問題含む)と合わせて算出した。

2.5.3 TT授業

1学期は「自分の意見を英語で言う」ことを目標に、*Solutions*(CENGAGE Learning)のトピック(*Bicycle Licensing* など)について、3~4人のグループで意見を発表させ、ALTと共にコメントをした。

学期末 *Speech Test* として、テキストの音読、自分の意見及びその理由を述べる、ALTの質問に答える、の3つを1人ずつ行い、授業内の *Speech* (校外学習の思い出)と合わせて、評価を行った。*Speech Test* のテーマは、既習の4つ *Bicycle Licensing? / Japlish / Amakudari / Kids and Cell Phones* から選ばせた。

2学期は、*Speech* (夏休みの思い出)の後に、*Parliamentary Debate* を行った。*Parliamentary Debate* とは、与えられた論題(motion)に対して、肯定側(Government)と否定側(Opposition)が3対3で行う即興型ディベートの方式である。(詳しくは駒場論集第56集、須田智之教諭の個人研究を参照)

論題(motion)には以下のようなものがあり、教員が自分で面白いものを考えることも可能である。

- Doping should be legalized.
- We should legalize casinos.
- We should legalize euthanasia in Japan
- We should abolish beauty contests.
- Tsukukoma should be a co-educational school.
- Tsukukoma students should go to the University

of Tokyo.

班分けはこちらで毎回変えて指定し、教員（山田とALT）は、足りないところなどにメンバーやジャッジとして一緒に参加した。

それぞれの役割や、タイムスケジュールなどは全て決まっており、ワークシートも用意されている。準備時間（15分）に話し合い、説得力あるポイントを考え、なおかつ相手のポイントも聞き取って、反論する力が求められる。また、自分が話す予定の英語を予め全て書いておくことは不可能であり、良い意味で「英語の適当さ」と「頭の回転の速さ（瞬発力）」が求められる。英語の流暢さももちろん有用だが、議論の説得力の方がむしろ勝ることで、普通の生徒が帰国生徒と互角に渡り合う場面もしばしば見られる。

評価は最終2回を Test Round とし、勝敗によって若干の点差をつけたが、あまり大きくならないように配慮した。3学期も引き続きこの Debate を行う予定だが、評価（評点）の問題については、参加の取り組みと結果（勝敗）のバランスを適切な形で表せるよう、引き続き検討が必要である。

テキスト

Expanding Tactics for Listening (Oxford University Press)

教材

CNN ニュースリスニング（朝日出版社）年2回発行
English Journal（アルク）月刊
Solutions (2009) (CENGAGE Learning)

2.6 高校2年生（68期）コミュニケーション英語Ⅱ

本校のコミュニケーション英語Ⅱは4単位であるが、3単位を教科書などを中心とした学習に当て、秋元が担当、1単位をティーム・ティーチングとして八宮が担当している。

2.6.1 （3単位分） 担当：秋元佐恵

6年間のシラバスの中で「発展期」1年目にあたる高校2年では、高度で良質な英語を読んだり聞いたりして理解し、その内容や意見を自分の英語で表現することが求められる。よって年度当初、2つのことを目標とした。

①文法のより深い理解

主な文法項目の習得は、昨年度で終えている。ここ

から先は、今までと違うアプローチで、より深く文法を理解させたい。そこで言語学の切り口を用いている。

②教養としての英語

詩やエッセイ、小説など、いろいろな時代の個人の文体に触れ、その時代背景とともに「教養としての英語」を味わってほしい。それには時間がかかっても単語が難しくても、原文を扱うのが何より。心に残る名文を、時に暗誦しながら読ませたい。

③「楽しい」瞬間の共有

これは昨年と同様である。クラス全員が集まっている場でしかし得ない体験があるはずだ。英語が得意な生徒も苦手な生徒も、41人全員がその教室にいて「楽しい」「わかる」という瞬間が、毎時間1回でもあればと願う。

以下、それぞれの目標に特化した取り組みを紹介する。

2.6.1.1 授業での取り組み

2.6.1.1.1 文法のより深い理解：ディクテーション＋言語学解説（目標①）

文法項目ごとに、日常よく使う構文を8個、ディクテーションさせ、その文法について言語学的な解説を加えている。年間全20回の予定。ディクテーション＋解説で25分ほど。たとえば、「時制」について学んだ時は、認知言語学上の3つの質問をした。

Q1: 英文法で基本となる時制はいくつあると考えられるか（英語学の立場で）。

Q2: 「現在時制」が表す時を定義すると？

Q3: 英文法で「相」は何種類あるか。

このような質問をすると、生徒達も文法の面白さをわかってくれるのではないかと期待する。問いを作るときには筆者がお世話になった外語大の宗宮喜代子先生の本を参考にしている（参考文献参照）。生徒の反応も良いので、今後も続ける予定である。

なお、文法2項目ごとに、筆者が以前から用いている「日英暗誦シート」で構文の暗誦・定着をさせている。左側に日本語、右側に英語を載せ、半分に折ってペアで覚えていく方式。これは、英語が得意な生徒も苦手な生徒もゲーム感覚ででき、苦手な生徒の知識定着にもなるので、今後も続けていくつもりだ。

2.6.1.1.2 教養としての英語（目標②）

その英文を読むことで、異文化や異なる時代への想像力が広がるような題材を選んでいるつもりである。主に以下の題材を扱った。

【1 学期】

・Reading a poem : *The Lake Isle of Innisfree* (W.B. Yeats), *At Grass* (Philip Larkin)

→それぞれの詩の意味解釈、形式解説 (stanza, metre, rhyme)。

→詩の形式を学んだうえで、ゴールデンウィーク中に、自分で韻を踏む詩を作成。学年コンテスト実施。

・Haiku in English

俳句の形式を学んだうえで、校外学習で1つ俳句を作り、学年コンテスト実施。

・Winnie-the-Pooh Chapter 1 ~ Chapter 4

・What Is Uniquely Human? (Unicorn II より)

【2 学期】

・The Kidnapped Prime Minister by Agatha Christie
夏休み課題の短編集の1つを、授業で扱った。

・The Tale of Peter Rabbit

→話を2つほど読み、最後にその話のその後のストーリーを創作させた。

・Twelve Angry Men (映画および脚本)

→古典的名作を見せ、陪審員制度について語彙を学ぶ。最後に映画についてテーマを選んで作文課題。

・The Future of AI (Unicorn II より)

→教科書の題材(2012)をイントロに使ったあと、AlphaGO の Deep Learning や BBC 最新ニュースなどを紹介して情報をアップデート。生徒のほう詳しく分野でもあり、いろいろ学ぶことができた。

【3 学期】

・アメリカ新聞コラムを読む

・英米名作短編を原文で味わう

2.6.1.1.3 楽しい瞬間の共有：クイズとミステリー

(目標③)

夏にアガサクリスティーを読ませた流れで、2学期から「ミステリー」の要素を授業にとりこんでいる。これは生徒にも概ね好評である。

【英語でクイズ！】

授業の最初は筆者が集めた英語クイズで開始。通常すぐに正解が出るが、たとえば次の問題は数分かかった。

Q. I can run but I can't walk, a mouth but I can't talk, a head but I can't think, a bed but I can't sleep. Who am I?

— A river.

クイズをやると、皆の集中力も高まり、いい雰囲気です。授業を始めることが出来る。

【Puzzles&Mysteries】

単元の間など息抜きしたいときに、2問のミステリーを配布し、競争で解かせる。300語程度のミステリーと、頭を使う英語パズル。解けた人は筆者に見せに来る。このところ使っているのは *Two-minute Mysteries* で、読解演習にもなり、優れた教材。

【単語で BINGO!】

昨年度から実施している。英語が得意な生徒も苦手な生徒もわりと楽しんで参加できる活動を紹介する。新出単語を定着させるための、自家製ビンゴである。中学の時にやり始めたが、今も続けている。各単元の最後、15分程度で行う。

1. 4×4の升目をプリントにする。

2. 教師がその単元の新出単語を20個発音していく。同時に板書する。

3. 生徒はそのうち好きなものを16個、升目に入れていく。

4. 準備ができたなら、教師がその単語を使った例文を読み上げ、生徒は自分のビンゴにあれば塗っていく。

5. 2列揃ったら BINGO! となる。シールや賞品を出す。

6. 最後に、板書した単語を正しい発音で皆で読み上げ、意味も確認する。

今後も3つの目標を念頭におきながら、授業を進めていきたい。

【参考文献】

Christie, Agatha. 1983. 『クリスティー短編集』. 東京：成美堂.

Milen, A. A. 1926. Winnie-the-Pooh. New York: Puffin Books.

Potter, Beatrix. 1982. The Complete Adventure of Peter Rabbit. London: Puffin Books.

Rose, Reginald. 2006. *Twelve Angry Men*. New York: Penguin Books.

Sobol, Donald J. 1967. *Two-Minute Mysteries*. New York: Scholastic INC.

宗宮喜代子. 2018. 『動詞の時制がよくわかる文法談義』 東京：大修館書店

2.6.2 (1 単位分 TT 授業) 担当・八宮孝夫

2.6.2.1 はじめに

高校2年生は、教科書を用いた通常授業が3単位、外国人講師(ALT)とのティーム・ティーチング(TT)が1単位で、筆者はこのTT担当である。

1学期は、あるテーマを決め、それについて、各班でまとめ発表、という形式、2学期は有名な歴史的な文

書（米国独立宣言）と Charles Chaplin の古典的作品 *The Great Dictator*（『独裁者』）の暗唱を行った。順次見ていく。

2.6.2.2 1学期の実践

1学期に扱ったトピックは以下の通り：

①Topic 1 Inemuri (Napping)

「居眠り」は、乗り物でも、授業や会議でも許される風潮があり、日本独特の部分がある。まず、比較的短い「居眠り」についての英文エッセイを読み、これから行う口頭発表での必要な表現などを見ていく。

また、後半では「居眠り」について科学的・文化的に論じたドイツ人研究者の論文を発表の資料としてプラス・アルファで配布した。生徒は、その論文を参考にして考察し、意見を組み立てて発表する。

各班、5、6名なので、導入、主張、具体例、結論など分担させ、班全体として一つの流れを形成するように指導する。もちろん、その論文に反論する形で進めても構わない。肝心なのは、その根拠が明確に述べられているかどうかで、評価はそのあたりで判断することになる。

②Topic 2 Tourism Boom

目下、日本は「外国人の観光ブーム」で、それについては良い面と悪い面がある。それに関するエッセイをまず読み、語彙を豊かにしたうえで、現在の「観光ブーム」に賛成か反対か、その根拠、具体例は何か、代案は何かなどを発表させた。

③Topic 3 Yuru-chara

これも、日本的な現象である。少し、ブームのピークは過ぎた感があるが、まだまだ全国的に有名なゆるキャラがいる。そもそも「ゆるキャラ」とは何か、という定義から始まり、自分の地元の町のゆるキャラを紹介させ、そのメリット・デメリットなどあげさせ、最後に、本校の「ゆるキャラ」を作るとしたら、どのようなものか、と具体的に「ゆるキャラ」を作らせた。

本校のシンボリックなものは何であると生徒が思っているのかを理解するいい機会となった。

TT は1単位であるので、25点分の評価となり、上の3トピックでは、それぞれ5点、10点、10点の評価をし、合計で25点とした。基本的に班単位での発表を評価の対象としたが、班の中でも特定の生徒の頑張り・貢献が感じられた場合には、それも評価し、個人の努力も無駄にしないように意識づけた。



「筑駒」のゆるキャラのプレゼン

2.6.2.3 2学期の実践

2学期は体育祭・文化祭と本校の2大行事があり、しかも高2生は、その行事の中心的役割を果たすため、放課後など班単位で集まって英文をまとめる時間はなかなかとりにくい状況である。また、1学期の発表で、どうしてもまだ原稿を棒読みのな生徒も見受けられた。

そこで2学期は、既存の英文を読み暗唱して再現発表するという課題に変更した。

① 米国独立宣言の一部暗唱（10行程度）

暗唱で大切なことは、多少難しくても、歴史的に意義のあることで、暗唱の強い動機付けになるような英文を探すことである。その点で、筆者は高1の3単位の授業で、3学期に「米国独立宣言」の一部暗唱を課しており、経験上取り組みもまずまずであるので、これを高2のTTでも実践してみることにした。ただ、高1の授業では3単位あるため、歴史的な流れ（独立までの状況、起草者の Thomas Jefferson について、など授業で背景知識を導入しながら暗唱へと持っていくことができる。1単位授業ではそれが限られるため、you-tube などの映像資料などを活用しながら、少なくとも歴史的背景は押さえるようにした。高2生は1年時に「世界史」を履修しており、その背景を部分的には心得ている点で導入しやすい面もある。

「独立宣言」はA4版の英文にして4ページほどもあり、相当長いものであるが、そのエッセンスは初めのA4版1ページの中に凝縮しており、その中に John Locke の唱えた社会契約論の精神もあり、また「日本国憲法」にも盛り込まれている、「基本的人権、生命・自由・幸福追求の権利」などが盛り込まれているので、それを含む10行程度が暗唱の価値ある部分ということになる。

1時間目に you-tube により American Revolution という5分程度の映像を視聴。英文に穴をあけたもの

を聞きながら穴埋めさせながら行う。穴埋めの確認をしながら、背景説明をし、最後の 15 分で、米国俳優陣による The Declaration of Independence の朗読を聞かせる (you-tube: Actors read the Declaration of Independence)。

2 時間目は、「独立宣言」の上述したエッセンスを含む最初の部分をリスニングさせ、キーワードの穴埋めをさせる。穴埋めをしながら、英文の言わんとする解説も行い、その後に ALT について、全体の音読をする。最後に個々の生徒に 1 文ずつ読ませると、どの単語が発音しにくいかわかり、そういう部分をもう 1 度全体でリピートする。前述の俳優陣による朗読などを参考に何度も音読、暗唱することを指示する。

3 時間目は個々の発表・評価。残念なのは、それについてコメントする時間が取れないことである。

② The Great Dictator のスピーチ暗唱 (グループ内でパートを決め、班全体として全文発表)

チャプリンの作品を 3 回に分けて視聴。毎回視聴後、内容に関する穴埋めサマリーを行い、理解を確認する。4 回目は、最後の演説部分のみ、もう 1 度聞き、キーワードを穴埋めさせて、その後確認。ALT につけて音読練習。もう 1 度映像で演説を聞き、できればオーバーラッピングを試みさせる (チャプリンは相当早口でまくし立てる。特に後半はエキサイトしてますます速くなる)。

視聴後に、その感想を英語で書かせ提出させた。総じて、チャプリンの名は知っていたが、実際に彼の作品は見たことがなかった。あまり期待していなかったが、それだけに視聴後のインパクトはすごかった、という趣旨のものが多かった。2 例をあげる：

Needless to say, Charles Chaplin is one of the most famous men in the world. Especially, he is known for having slipped on banana peels in many of the scenes of his films. However, since I have [had?] never seen any of his movies entirely before, it was my first time to see his film. My first impression when I heard the title was not so good. Because it sounded like something boring like many documentaries dealing with wars seriously. (Of course, I know it is important for us to study history from such kind of movies) But it wasn't! The movie was abundant in unexpected humorous elements without being devoid of the essential facts of World War II. The last was remarkable where the barber wearing Hynkel's costume made a

speech in front of the military while real Hynkel was arrested mistakenly. I'm sure that no one who sees this film could expect the ending of it. I have never encountered such a sophisticated story in my life! I assured myself that he was a real endowed talent. (2-1 N 君)

I was greatly moved to see his movie. I had heard of it before, but I didn't know much about it and Charlie Chaplin until I saw it in this class. He is said to be a great actor and director, but I hadn't seen his performance until then. I was surprised that he had skillfully performed two contrasting men, the cruel dictator and the gentle barber. The most impressive scene in this movie was the last speech that Chaplin made. The cruel dictator should disappear from this world. Everyone has the right to live a happy life. We shouldn't discriminate against anybody. We all should long for world peace, but I feel recent world is filled with discrimination. So I think we should see this movie now. Love is everything. Nothing is more precious than love. I feel it very much in this movie. I think this movie shows the importance of love. "We think too much and feel too little: more than machinery we need humanity, more than cleverness we need kindness and gentleness. Without these qualities, life will be violent and all will be lost." Those are my favorite words.

(2-1 Y 君)

また、映画の中で使用されている曲との関連を指摘したものもあった：

I was most impressed by the music which was used in the last scene. To my surprise, it was the same as the piece used in the scene in which Hynkel tossed a globe balloon around his room.

The name of the piece is "Prelude to Act I" from one of the famous operas composed by Richard Wagner, "Lohengrin." I think it is ironical that Chaplin's using the same music in these scenes. Moreover, it is said Hitler preferred listening to Wagner's music. I realized the high intelligence which Chaplin had when I knew that fact.

In addition, after that scene, the barber worked rhythmically with "Hungarian Dance No. 5 in G minor" which is composed by Johannes Brahms.

He was a great “absolute music” composer, but Wagner was the leading expert of “program music.” That’s why they came into conflict in the 19th century. I think this history is also interesting.

(2-2, K 君)

戦争シーンについて言及したものもある：

Commonly the Chaplin’s speech is thought of as the most important scene of “The Great Dictator.” But I will talk about the opening scene in WWI. A lot of new weapons – lethal weapons – were used in the great war. For example, tanks, airplanes, and machine-guns. Also tactics changed utterly and drastically. Soldiers fought from the trenches for years.

Chaplin runs in the trench, throws a grenade, shoots a machine-gun and jumps onto an airplane in the film. Wire entanglements prevent the enemies from charging.

I think these realistic descriptions of the battle field should be appreciated. (2-2, M 君)

11月の文化祭後の3回を発表の時間にあてた。発表は、座席表の縦の1列6名（5名の場合もあり）を1班とし、計7班に分け、各班の班員が分担して全員で“The Great Dictator”のスピーチを発表した。

文化祭直後の発表は練習的にもハンデがあるため、各クラスでボランティアを募り、発表が準備できそうだという見込みのある班2班の発表とした。第2回は、3班を割り当て、最後の回は2班を割り当てた。実際に最初の回は教師も生徒も段取りが悪く、2班でもぎりぎりの発表となってしまった。

班による多少の出来不出来はあったものの、概してよく準備をし、前のステージで班ごとに演じた（オープン・スペースを使用）。また、聴衆には評価表を渡し、それぞれの発表について評価をさせた（これは正式に評価に加えたわけではないが、筆者とALTの評価が割れた場合などに、参考するには有効であった）。

チャプリンの演説で気づくのは、最初の部分はユダヤ人で床屋であるチャーリーが、まだ幾分戸惑いながら“I’m sorry, but I don’t want to be an emperor”と訥々と始める。しかし、“To those who can hear me, I say ‘Do not despair.’”あたりから、聴衆全体を意識するようになる。そして、“Soldiers! Don’t give yourself to brutes”と聴衆に訴えかける部分からは、役としてのチャーリーにチャプリン本人が乗り移り、チャプリ

ン自身の言葉で語っているのである。このあたり、『チャプリン』（江藤文夫著・岩波ジュニア新書）に詳しい分析があるので、一部引用する：

「チャーリーがしゃべり出す。しかし演説の展開が示しているように、チャーリーの語る言葉の背後に、作者であるチャプリンが存在して、チャーリーの言葉にリアリティを与えていることがわかります。そして演説のなかば、「兵士諸君！」とマイクを通して兵士たちに、また世界中の人たちに呼びかけるころから、語調は明らかに変わり、その直後に正面を向いたときには、彼はカメラのレンズを見てしゃべっているのです」

ただ暗唱するのではなく、そういう流れが表現されているか、という点が重要で、評価の高かった発表ではその点も優れていた。

2.6.2.4 今後の予定

2学期の発表活動は、比較的うまく行ったように思われたが、アンケートを取ってみると、「折角ALTがいるのに、映画鑑賞と発表活動が大半を占めて、ALTとの英語によるコミュニケーション活動がなかったのは残念だった」という意見がかなり認められた。確かにALTの活かし方という点では再考の余地がある。

3学期は、米国独立宣言を踏まえて、リンカンのゲティスバーグ演説の暗唱を行おうと考えているが、一方でALTとのコミュニケーション活動も視野に入れないといけない。それを両立させるようなやり方を考慮中である。

2.7 高校3年生(67期) コミュニケーション英語Ⅲ 担当：高橋深美

2.7.1 はじめに

高校3年生のコミュニケーション英語Ⅲは高校2年生のコミュニケーション英語Ⅱの流れを引き継ぐ。この論集の締め切りが毎年12月であるため、昨年度の3学期の取り組みから述べることにする。

2.7.2 コミュニケーション英語Ⅱにおける3学期の取り組み

3学期はまず2学期からの継続で、The Diary of Young Girlを4回扱った。その後、教科書(Unicorn English Communication 2)の11課 Just Enoughを扱った。この課の冒頭がいわゆる環境問題を扱う英文によくある書き出しで、生徒は「またこういう話か」と思ったようであるが、筆者のAzby Brownが著した同名の原書を活用して内容を深めた。この書物は江

戸の町人がいかにエコライフを営んでいたかを詳述したもので、教科書にも一部が掲載されているが、江戸庶民の生活様式が精密なイラストで数多く示されている。授業ではパッセージの読解および意見交換を行った。

また、別の話題として、ヒト遺伝子組み換えの論理について考えてみた。以前使用した、Michael Sandel の “The Case against Perfection” (邦訳「完全な人間を目指さなくてよい論理」)および他の文章を参照して、読解と作文の教材を再作成した。旧優生保護法により、強制不妊手術を受けさせられた人たちの権利の回復が図られている社会状況があり、一方では、現在ではヒトゲノムが解読され、ヒト遺伝子の組み換えが技術的に可能となっており、改めて生徒の Eugenics をめぐる議論を促すことができた。

2.7.3 コミュニケーション英語Ⅲにおける取り組み

コミュニケーション英語Ⅲは3単位であるが、2単位分は多様なジャンルの英文を読むことを主軸に授業を展開した。教科書(Prominence Communication English III)は、よい教材もあるのだが、授業では1回完結で500~600語の英文を読むこととしたので、別の教材から、例えば以下のようなものを取り上げた。

- ・言語の進化
- ・環境保護
- ・理性と本能
- ・エッセイ

なお、高校2年生までの教材は ENGLISH ONLY が可能であるが、高校3年生で扱うものには抽象度が高いものがあり、例えば邦訳すると「経験や学習によって影響されず、理性的な指令に勝る非常に強い要因が考えられる」というような内容を英語だけで説明した場合、非常に手間がかかり、本文の流れを見失ってしまう恐れがある。そのため、英語で説明できるところは英語で行い、日本語を使った方が理解が早い部分には日本語を使用して授業を進めた。

また、2学期の一部の時間を使って、条件英作文の練習を行った。日本的な事象から、例えば、ICカードや日本固有の建築を取り上げ、外国人に説明するという設定で文章を書いたり、リア王の一部を取り上げ、その台詞について思うところを文章にしたりするなど、「発信的」な態度につながられる試みとした。

このほか、3単位中1単位分については、米国における社会生活、学生生活を基本に取り上げているリスニング教材を扱った。この教材はある意味平凡な会話練習だけではなく、犯罪に巻き込まれていくストーリーが織り込まれ、生徒の興味を引いたようであった。

参考資料

- The Case against Perfection by Michael J. Sandel (2007 Belknap Harvard)
 Just Enough by Azby Brown (2013 Tuttle)
 The Diary of Young Girl (Anne Frank)
 King Lear (William Shakespeare)
 Happy Days and other very short stories by Jake Allsop (1998 Penguin Books)
 Time Is Running Out (朝日出版社)
 英語で説明する日本の観光名所100選 改訂版 植田一三編 (2014 語研)
 新・英語で語る日本事情 江口裕之/ダニエル・ドゥーマス著 (2012 The Japan Times)

2.8 高校3年生(67期) 英語表現II

英語表現II(2単位)は、阪田と山田で週1時間ずつ担当し、阪田が主に和文英訳・文法を、山田はエッセイライティングを扱った。

2.8.1 Writing パート 担当：山田忠弘

エッセイライティングパートでは、30~80語程度の自由英作文練習を行った。授業では、自作プリントを用いて2問程度の演習を行い、その日の課題(例1)として40語程度の英文を書いて提出させ、採点して翌週に返却している。また、これと別に月1回70~80語の問題(例2)を課して、採点・返却している。各課題の内容点(加点)要素は、後日返却の際に示し、ミスは原則-0.5点と、ルールとして最初に示した。

(例1) あらすじを50語以内の英語で書きなさい。



※ Larry : この女性のパートナーの男性

採点(8点満点)は、以下の内容があれば加点し、ミスに応じて減点する方式で行った。

- ① パーティで困った ① 誰も英語が話せない/彼女は日本語が話せない ② 幼児なら自分の日本語でも何とかかなりそう/話すのにちょうどよさそう
 ① その子に日本語で話しかけた ① その子の日本語

も理解できなかった／その子も日本語が流暢だった
② 結局、犬しか話し相手がいなかった

(例2) Write within 100 words in English in answer to the following question:

“If you were a high school English teacher, how would you help your students improve their English?”

内容点は以下のように設定し、採点(20点)した。

① 主題文 4点 ② 支持文 12点 ③ まとめ文 4点
また、返却時に以下のアドバイスを解答例に加えた。

ポイント

- ・主題文もまとめ文もないものは、単なる箇条書きの羅列であって文章ではない。
- ・主題文とは、以降の内容を簡潔に表すもので、それだけ読んでも全体の概要が理解できるものである。
- ・支持文(具体的内容・例)は、最後まで「主題文」と内容的なつながりがなければならない。「主題文」を常に頭に置き、脱線しないように最後まで気を配ること。
- ・各支持文は、情報として異なる(述べられてない新出の要素がある)ことが重要である。重複した内容の文は、採点上無いものと扱われる。
- ・まとめ文は主題文と大きく離れてはいけないが、新しい要素もなければいけない。当然、問題文や主題文の丸写しに加点は一切ない。

いずれの課題でも「日本語できちんと骨子を作る」(できるだけ多くの加点要素(内容点)を取る)、「できるだけ平易な語彙・構文」「動詞の形を意識する」(減点を防ぐ)といった当たり前のことを繰り返し指摘し、意識させるようにしている。

参考書

「灘高キムタツの東大英語ライティング&グラマー」
(2006)(アルク)

2.8.2 和文英訳・文法演習 担当：阪田卓洋

2.8.2.1 概要

この授業では和文英訳、文法演習を担当した。筆者は3年連続でこの授業を持っているため、これまでの反省を生かして授業をすることにした。1学期の授業の流れは以下の通り。

1. 文法小テスト
2. 前時の提出課題の feedback
3. 文法演習
4. 英字新聞などの記事を部分英訳
5. 和文英訳の提出課題

前時の復習として文法小テストをしてから、提出課題の feedback を行う。共通した誤りなどプリントにまとめて解説する。毎回、授業の終わりに3文程度の和文英訳を課している。大学入試問題を使うことが多い。

そこから本時の学習として一つの文法項目を紹介する。3年生ともなると大体の文法は正確に使えているが、やはり過去完了形や仮定法などは不正確な知識のまま英作文に使っている生徒も多い。例文を示しながら、和文英訳の問題を解いてもらい、正確な使い方を伝えた。

授業の終盤には英字新聞(The New York Times, Independent, The Guardianなど)や Time から記事を抜粋し、和文英訳の問題を作成し、2題程度解いてもらった。仮定法、無生物主語など生徒たちが苦戦しそうだと思われる箇所を選び、和訳させる。ここで和訳させた一人一人の解答を個別にチェックすることはできないため、模範解答と解説を載せたプリントを配布し各自に答え合わせをさせ、質問を個別に受け付けるようにしている。

授業の最後には、提出課題を配布し授業時間内にさせた。できるだけ授業で学習した内容が生かされるような課題を与えた。毎週100人分の英作文を添削・採点することはタフだが、筆者にとって勉強になることが多く、また生徒一人一人の英語力が手に取るようにわかるため、これは欠かすことができない。

以上が1学期の授業の流れだが、feedback のあり方に限界があると感じ始めた。というのも、文法的には正しいと言えるが、この表現の「適切さ」となると、筆者の能力ではお手上げになってしまうことがある。もちろん、辞書や Google 検索を用いて、より良い表現方法を提示することができるが、それでも資源は限られている。彼らの英語運用力を高めるためには、英語話者が同じような和文英訳課題をしたときに、どのような表現を使うかを豊富に示すことにあると思った。また、教員対生徒の feedback では、結局教員が一番辞書を使い、勉強する時間が増えるが、生徒達が辞書を引く機会は自分たちの英文を推敲する段階に限られている。生徒たち同士でも英文を批評し合う peer feedback を実施することが重要ではないかと思うよ

うになった。そこで、2学期には以下の点を踏まえて和文英訳課題を実施した。

1. 生徒たち同士で英文を批評し合う時間を作る
2. 英語話者が書いた英文を複数提示する

両者を達成するために考え付いたのが、英訳されている日本文学作品を英訳する課題を出すことだった。今回は試験的に夏目漱石『こころ』を題材として以下のように授業を展開してみた。

【1時間目】

夏目漱石『こころ』の一部分を配り、一人の担当箇所が3,4文程度になるように役割分担する。各生徒はGoogle Form(ネット上に設けられたアンケートフォーム)に自身の英訳を提出する。

【2時間目】

ネット上に提出された英文を、担当箇所ごとにソートする。全部で4クラスあるため、同じ個所の英訳が4種類存在する。これを各クラスの担当者にコピーして配布し、自分が担当した箇所を他クラスの担当者はどのように訳しているかをチェックする。同時に、辞書やインターネットを用いて、それぞれの表現を訂正する。そのfeedbackシートを授業後半に回収する。

【3時間目】

回収したfeedbackシートをコピーして、担当者に再度配布する。そうすると、担当者の手元には、他クラスの担当者が自分の英作文をどのように添削したかが分かる。全4クラスのため、自分の英文を他クラスの3人が添削したことになり、3種類のfeedbackが得られることになる。それらを元に自身の英文を推敲し、再度Google Formに提出する。

【4時間目】

提出された英文をクラスごとにソートする。そうすると、各クラスの『こころ』英訳作品が完成する。それを、プロの翻訳家の作品と比較する時間を設ける。比較に用いたのはKondo Ineko, Meredith McKinney, Edwin McClellanのものである。振り返りシートを配布し、自分の英訳とプロの英訳を比べ、気づいた点、感動した点などを書いて提出してもらおう。振り返りシートは授業最後に集める。

【5時間目】

振り返りシートの項目を整理し、一覧にしたプリントを生徒に配布する。自分が担当した箇所だけでなく、他の人たちがどのように訳し、それをプロがどう訳したかを分かるようにする。

以上が授業の流れである。振り返りシートを見る限りは、生徒全員が少なくとも1つは気づいた点を挙げ

ており、プロの翻訳家の英文に触れることが彼らの言語への気づきにつながったと思われる。まだ改善が必要な手法だと思うが、生徒同士の英文批評、英語話者の英語に触れる、という機会を確保した和文英訳の指導法を今後も考えていきたい。

<訳書>

1. Soseki, N. (1957). *Kokoro* (Edwin McClellan Trans.). Tuttle.
2. Soseki, N. (2010). *Kokoro* (Meredith McKinney Trans.). Penguin Books.
3. 夏目漱石 (2015). 『こころ』近藤いね子訳, 国書刊行会。

<参考文献>

1. 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』開拓社
2. 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説』金子書房
3. 長原幸雄 (1990) 『関係節』大修館書店
4. Hewings, M. (2013) *Advanced Grammar in Use*. Cambridge University Press.
5. Leech, G.N. (1987) *Meaning and the English Verb*. Longman.
6. Quirk et. al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.

3. 課題研究における取り組み

3.1 概要

本校では生徒の主体的な学びを育む一環として、高校2年生において、学校設定科目課題研究、または理科課題研究(各1単位)のうち一方を選択して全員が履修することとしている。

3.2 中学3年生(70期)テーマ学習

担当: 須田智之

講座名「Science Dialogue Jr.」では、3つの内容①海外からの若手研究者に自分の国や経歴・研究内容について英語での講演を聞き、質疑応答などでコミュニケーションを図る、②英語でのプレゼンテーションを各自でテーマを設定して行う、③様々なトピックについて英語で議論する機会を設ける、について取り組んで知る。①の講演内容については、講演者による実験や映像等を併用した上手なプレゼンにより、大体の内容は理解できているようである。生徒には、毎回(講演者は異なる)講師に1人1つは質問をすること、ア

ンケートのコメント欄に講師へのメッセージを英語で書くことを義務づけている。

今後は主に冬休み期間に、②の英語でのプレゼンテーション作成を生徒各自が選んだテーマで進めていく予定である。③については、他校の文化祭に招かれて英語ディベートの試合を行うなどの活動にも取り組んでみた。

上記の活動を通して、参加生徒が各自の知見を広げるとともに、英語で受信・発信する力を身につける機会を提供していきたい。



3.3 高校2年生（68期）課題研究

担当：多尾奈央子・高橋深美

高2課題研究では、日本学術振興会の『サイエンス・ダイアログ』プログラムを活用し、海外の若手研究者から自国の文化や専門分野について英語による講義を聴講している。発表内容だけではなく、発表の仕方にも注目し、学術的な内容をわかりやすく伝えるプレゼンテーションを習得できるようにしている。

サイエンス・ダイアログと並行して、生徒一人一人が自身のテーマを設定し、研究して発表する機会を年度末に設けている。11月現在では、それぞれの研究テーマに従い、進捗状況を受講生相互にレビューしている段階。相互レビューを基に推敲を進め、1月中旬の本発表を迎える。独特な着眼点の興味深いテーマも多い。以下にその例を示す。

- ・ トロツク問題：義務論と功利主義
- ・ 負傷によるスポーツパフォーマンスへの影響
- ・ 日米間のシャープペンシル芯の比較
- ・ 売れる小説の構造とは
- ・ AIの教育現場への活用

1月の本発表では下級生が聴取者となり、異学年での学び合いの場にもなる。そのことを踏まえ、より緊張感をもって研究と英語での発表に向けて真摯に取り

組んでいることが各講座でよく分かる。12月には本発表に向けてのリハーサルで英語話者の東大留学生による指導を受けた。題目を決めさせて研究から発表までを生徒の主体性に預けるだけではなく、細かく進捗状況の報告から受講生同士での質疑応答（英語による）の回を重ねたことで研究内容も着実に refine されていたことが実感として強い。

表2. Science Dialog & DIY年間計画（全32校時）

Date	Speaker	Topic
①May 12	—	全体オリエンテーション
②June 2	—	講座オリエンテーション
③June 16	Science Dialogue 講師 #1	
④ June. 30	各受講生	構想発表
⑤Sep. 15	Science Dialogue 講師 #2	
⑥Sep. 29	各受講生	中間報告
⑦Oct. 13	Science Dialogue 講師 #3	
⑧Nov. 10	各受講生	リハ・相互評価
⑨Dec. 18	各受講生	native 講師による指導
⑩Jan. 12	研究発表①	（中3・高1に向けて）
⑪Jan. 26	研究発表②	
⑫Mar. 11	総括	

4. 国際交流に関する取り組み

4.1 概要

本校はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）として、海外の高校などとの研究交流実績を上げてきた。また23年度より筑波大学はその附属学校に対して、「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3拠点構想を実現するよう求めており、この数年で本校生徒が国際的に活躍する機会は確実に増えている。

以下に、2018年度の国際交流活動（予定を含む）を挙げ、いくつかについて説明する。

<*はSSH関係>

- (1) *台湾台中市立高級第一中学（台中一中）訪問
 - (2) 釜山国際高校・KSA（韓国科学アカデミー）訪問
 - (3) Thailand International Science Fair 2019への参加
- 日本学術振興会による Science Dialogue 参加

(4) イングリッシュ・ルーム

また、訪問受け入れとしては以下のとおりである：

- (5) 台湾台中市立高級第一中学より本校訪問
- (6) 釜山国際高校から本校訪問
- (7) 筑波大学外国人教員研修留学生、音楽祭・文化祭参観。

昨年までは、横浜サイエンスフロンティア高校や立命館高等学校など、SSH 重点校との提携プログラムがあったのであるが、諸々の事情からそれらのプログラムがなくなり、少し寂しいことであるが、逆に、(7)の筑波大学外国人教員研修留学生との交流では、これまで行事の最中の来校で、実質的な交流がなかったことを鑑みて、今年度は、中学の授業に来てもらい、生徒たちと文化交流を行う予定である。中学生の国際プログラムはこれまでなかったので、その点画期的ということができる。

4.2 具体例：台中一中訪問

6月に台中一中派遣生徒を募集し、担任団が選抜、7月の終業式後に、初顔合わせをして、高2の12人が6本の研究発表をし、高1の4人が学校紹介をすることに決まった。

2学期は、個々の研究チームごとに課題研究の担当教員が顧問となり研究を進めた。11月中旬にA4判2ページの英文アブストラクトを提出させ、「アブストラクト集」にまとめた。タイトルは以下の通り：

- 1 The meaning of visiting MINAMATA
- 2 Research on “Cevian Triangle“
- 3 Consideration of the tactics of Blackjack
- 4 What causes Daphnia Pulex to die?
- 5 Trajectory of a Magnetic Pendulum
- 6 The present and future for basketball and its relations with artificial intelligence
- 7 School Introduction (高1)

期末考査後に、Mr. and Ms. Vierheller によるプレゼン講習を行った（写真）。



直前プレゼン講習の様子

プレゼン講習で Mr Vierheller が強調したのは、「聴衆は発表内容について全く知らないのだから、そのことを考慮してプレゼンせよ」、ということであった。確かに、生徒は自分のプレゼンテーションを行うことに夢中で、相手にわかってもらうという視点に欠けていた。事前にその点に気づいたのは大きな意味があった。

12月11日～16日、台中一中派遣を実施し、2日間にわたって、研究交流会を行った。なお、その内容については、別途『台中一中派遣プログラム 2018 実施報告書』にまとめる予定なので、それを参照されたい。

4.3 プレゼンテーション・ワークショップ

英語科では、上記の台湾派遣生徒向けを含め、Vierheller 夫妻を講師に招いたプレゼンテーション・ワークショップを年3回、開催している。

- ① 1学期末：中級者対象
- ② 2学期末：台湾派遣生徒対象
- ③ 3学期末：初級者＋韓国派遣生徒対象

1学期末の“Learn to Present”と題された講座には主に中3・高1の生徒約20名が参加し、グループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるさまざまなスキル、具体的にはスピーチの声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについてであった。2学年から成る各グループは協力して原稿を作り、発表をしながらその都度、指導を受けた。

異なる学年での交わりや、話し方に関するアドバイスなどは、普段の授業ではなかなか経験できない取り組みである。3学期には例年通り、中1・中2対象の「ビギナーズ用ワークショップ」も開催予定である。

4.4 イングリッシュ・ルーム

イングリッシュ・ルームは、東京大学の大学院留学生等に依頼し、通常は月に2～3回の平日放課後1時間半程度で、その日に来た生徒に合わせて相手をしてもらっている。また、中3テーマ学習・高2課題研究の「サイエンス・ダイアログ」では生徒の発表指導や、台中一中や釜山国際高校との交流での発表原稿・プレゼン指導、語学部のディベート指導にも活用している。



4.5 おわりに：今後の予定

今後、1月に釜山国際高校生の本校来校、3月に本校生徒の釜山国際高校・KSA派遣プログラムが予定されているが、台中一中の場合と同様、プレゼン発表を行うので、引率教員が中心となり指導をしていく予定である。

L1 Part 1 summery chart
About 130 years ago...



Arthur Conan Doyle
(a poor eye doctor)
At Southsea
in England

in 1887



Sherlock Holmes
(famous detective)

*short stories in *The Strand Magazine*
in 1891



*pleased but perplexed
*historical novels
rather than mysteries
*Doyle
→stop writing about
Holmes
*His mother
→"You can't, You won't
You mustn't."

(A Scandal in Bohemia)
*Population →explode
throughout the nation

*earn only 25 pounds
*not contribute much
to his income

* 今日やったことを思い出しながら、絵と単語をヒントに英語で説明してみよう。
(適宜、単語を補ったり、時制を変えたりすること。
本文通りでなくてもよい。プラス情報を入れるとさらに良い)